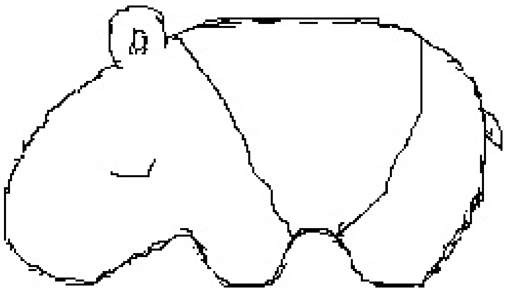
ばくちゃん



1

　ばくちゃんはしとしとと降りつづく雨のなかをひとりで歩いていました。
　バクのばくちゃんには家族も友達もいません。もうながいあいだひとりぼっちなのでさみしさには慣れていましたが、それでも冷たい雨はちくちくとこころに刺さります。

　ばくちゃんはだんだんと気が重たくなってきて、ふぅとひとつため息をつきました。
　すると、とつぜん頭の上にあざやかな水色の傘が差しだされました。
　振りかえって見ると、そこにはきれいなおねえさんが立っていました。

「濡れちゃうわよ」
「いいんです」
　ばくちゃんは傘の外に出ようとしました。
「よくないわ」
　おねえさんの水色の傘が追いかけてきます。
「風邪を引いてしまうでしょ。お家はどこなの？」

　ばくちゃんは、きれいなおねえさんに親切なことばをかけられて、もじもじとしてしまいます。
　それに、おねえさんに橋の下のちっぽけな家のことを知られるのも恥ずかしかったのです。

「どうしたの？　そんなに照れなくてもいいじゃない」
　ばくちゃんはおねえさんのやさしい笑顔をみているうちに、見栄をはるのがばからしく思えてきて、橋の下に住んでいることをしょうじきに話しました。
「じゃあそこまで送っていくわね」

　おねえさんはばくちゃんが濡れないように、傘をかたむけながら歩いてくれます。
　風が吹くたび、おねえさんの長い髪がふわりとゆれ、とてもいい匂いがしました。
　おはなしをしながら川ぞいの道を歩いてゆくと、あっというまにばくちゃんの家に着きました。

「おねえさんありがとう。おかげで濡れずに家に帰ることができました」

　その時、急にばくちゃんのおなかがぐぅーっとなりました。
　そういえば、ばくちゃんは昨日からなにもたべていません。
　それはとても大きな音だったので、とうぜんおねえさんにも聞こえてしまいました。

「あら、おなかがすいていたのね」
　ばくちゃんは恥ずかしくてうつむいてしまいます。
　おねえさんはバッグの中をごそごそと探り、なにかを取り出しました。
「はい、このチョコレートをどうぞ。わたしが半分食べちゃってて申しわけないんだけど」
　おねえさんはそう言って、ばつが悪そうに笑いました。
「そんな、いいんですいいんです」
　ばくちゃんはあわてて首を横にふります。
「遠慮しなくてもいいのよ。それに、わたしはいまダイエット中だから」
　おねえさんはいたずらっぽく片目をつぶりました。

「おねえさん、ありがとう」
　ばくちゃんは泣き出しそうになりながらチョコレートを受けとりました。
「いつかきっとお返しをします。だから、おねえさんの住所を、ぼくに教えてもらえますか？」
「ばかね」
　お姉さんは笑いました。
「そんなのいいのよ。困ったときはお互いさま」
　おねえさんは、じゃあまたねと、手をふりながら帰ってしまいました。

　ばくちゃんはうす暗い家の中で、ひとりひざを抱えてチョコレートをほおばります。
　それはとても甘くて美味しくて——
　いつのまにか、ばくちゃんの目からは、ぽろぽろと涙がこぼれていました。

　ばくちゃんはどうしてもおねえさんにお礼が言いたくなりました。
　でも、ばくちゃんにはおねえさんと会うすべがありません。
　ばくちゃんは毎日毎日おねえさんの住む家をさがして町を歩きまわります。
　でも、なかなか見つけることはできませんでした。
　もうおねえさんと会うこともないのかなと、ばくちゃんがあきらめかけていたある日のことです。

　いつもは通らない道を歩いていると、ばくちゃんの長いお鼻にとつぜん、ふわりといい匂いがとび込んできました。
　それは、ばくちゃんの記憶に残っていたあのおねえさんの香りでした。

　あわてて顔を上げたばくちゃんの目の前には、赤屋根のすてきな一軒家が建っていました。
　きっとここがおねえさんの家にちがいない。
　そう思ったばくちゃんは、どきどきしながら玄関のドアをノックします。
　もう片方の手には、河原に咲くたんぽぽで作った小さな花束が、ぎゅっとにぎられていました。

　しばらく待つと、開いたドアのすきまから、おねえさんがひょっこり顔を出しました。

「あら。あなたはあの時の――」
「こんにちはおねえさん。このあいだのお礼を言いにきました」
　ばくちゃんはぺこりとあたまを下げます。

「わざわざ遠くまでありがとう」
　おねえさんの顔からやさしい笑みがこぼれました。
「どうぞ、中に入って」

　ばくちゃんが先日のお礼を言って、たんぽぽの花束を渡すと、おねえさんはとても喜んでくれました。
　おねえさんは手づくりのお菓子や香りの良い紅茶で、ばくちゃんをもてなしてくれます。
　あたたかい紅茶を飲みながらの他愛もないおしゃべりは、ひとりぼっちのばくちゃんにとってはなんとも楽しいひとときでした。
　でも、不思議なことにおねえさんは、ときおりふっと暗い表情を見せます。

「おねえさん、どうかしたの？」
　ばくちゃんはおずおずとたずねました。
「じつは、むすめのユカがね……」
　おねえさんはそう言ってため息をつきます。
「ここのところ調子をくずして学校を休んでいるのよ。悪夢が怖くて夜眠れないと言うの」

　ばくちゃんはその話を聞いて、いいことを思いつきました。
「それならぼくがなんとかできると思います」
「いいのよ。むずかしい問題だから」
　おねえさんはあきらめ顔で首をふります。
「ぼくを信じて、すこしだけ時間をください」
　ばくちゃんは力強くうなずきました。

「ありがとう。気持ちだけでも嬉しいわ」
　おねえさんはそう言うと、弱々しくほほえみました。

5

じつは、ばくちゃんには人の夢の中に入り込めるという特技があったのです。

ばくちゃんはさっそくその日の夜、ユカちゃんの夢の世界に出かけてゆきました。
するると、大勢の悪いものが好き勝手に暴れまわっています。
夢の入口にいるユカちゃんはぶるぶると震えて怖がっていました。
怒ったばくちゃんは、大きな長いお鼻で悪いものたちを吸い込むと、ばくばくと食べてしまいました。

ふたたびぐっすりと眠れるようになったユカちゃんは、すっかりげんきを取りもどして、また学校へ行けるようになったそうです。

よろこんだおねえさんは、ばくちゃんの家をおとずれて、なんどもお礼を言いました。
ばくちゃんは、ユカちゃんの夢のせかいで起きたことについて、くわしくおねえさんに説明しました。
夢の中の悪ものを食べることができるというばくちゃんの特殊能力に感心したおねえさんは、ばくちゃんにあるおしごとをしょうかいしてくれました。

それは悪夢に困っている人たちを助けてあげるおしごとです。
ばくちゃんは人に喜んでもらえるそのおしごとに、今ではおおきなやりがいを感じています。
それにしょうらいはおねえさんたちの家の近くにじぶんの家をたてるという夢を持つこともできました。

でも、ばくちゃんにとってなにより嬉しかったのは——
ユカちゃんが時々、遊びにきてくれるようになったことでした。

おや？
ばくちゃんの家の外で、小鳥がちゅんちゅんと鳴きはじめました。
どうやら昨日から降りつづいていた雨はもうやんだようです。

ユカちゃん、きょうは遊びに来てくれるかな？
ばくちゃんは、ユカちゃんの学校が終わる時間が近づいてくると、いつもどきどきそわそわしてしまいます。

「ばくちゃーん！」
外からユカちゃんの声がしました。ばくちゃんはうれしくてうれしくて、すぐに家を飛び出します。
花柄の長ぐつをはいたユカちゃんが、水色の傘をぐるぐると振りまわしながら河原の土手を走ってきます。

「ねえねえ、ばくちゃん、きょうはなにして遊ぶ？」
ユカちゃんは息を切らせながら言いました。
「なんでもいいよ」
ばくちゃんのことばを聞いてユカちゃんはいっしゅんむっとした顔をみせます。
「だって、ユカちゃんとなら、なにして遊んでも楽しいもん」
ユカちゃんの顔がひまわりのようにぱっとかがやきました。
「あたしも！」
ばくちゃんとユカちゃんはうふふと笑いあうと、手をつないでかけ出しました。
それをみた小鳥たちも、ふたりのせなかを追いかけるように飛び立ちます。

いつのまにか川の上に広がっていた青空には、色あざやかな虹の橋がかかっていました。

——ユカちゃん、おねえさん、ほんとにありがとう。
ぼくはもう、ひとりじゃない。

おわり